

(1) 作文教育研究会

会 長 上田 浩稔（中村南小学校）
副会長 大西 由香（東中筋小学校）
事務局 渡邊 真菜（東山小学校）

1. 研究主題

「書く意欲を高める指導」

2. 研究経過

月 日	活 動 内 容	場 所	備 考
8月5日（金）	夏季研修会 伝達講習：大西 由香 「心に残る実践 作文、詩の 書かせ方」 実践発表・交流	中村南小学校	6名参加
1月12日（木）	学習会 ・「四万十川の子」校正作業 ・学習会「児童・生徒の作品を もとにした『詩』の読み方、 書かせ方の指導について」 ・本年度の活動の反省 ・会計報告	中村南小学校	6名参加

3. 今年度の取り組みより

1 夏季研修会

1、報告「心に残る実践 作文、詩の書かせ方」 大西 由香（東中筋小学校）

（1）年間計画の位置づけと工夫（2019年 福田 千恵先生の実践から）

国語科の目標・系統に沿った付けたい力を整理し、「書くこと」の年間計画を立てる。

生徒が書いた作品を掲示したり、単元の振り返りや家庭学習を工夫したりすることで、生徒の書く意欲を高めている。

（2）系統的な指導について（2019年 田中 郁先生の実践から）

作文教育は、すぐに結果が出るものではなく、長い取り組みの中で子ども達が心の叫びやつぶやきを安心して表現していく。それを教師が受け止め、学級で読み合うことを繰り返す中で表現技術だけでなく子ども達の心にゆったりと優しさを共有する力が育っていく。

○発達段階で大切にしたいこと

低学年：つぶやきを大切にしながら、体験と結びつけて書く。書き言葉への抵抗を軽減する。

中学年：低学年での指導を基礎に、書く題材や範囲（期間）を広げていく。文の構造も意識させながら、中心を意識して書く。活動的な中学年にふさわしい題材を考えて書く。

高学年：簡単に書く部分（略叙）と詳しく書く部分（精叙）を意識して書く。高学年だからこそその題材を考えて書く。（労働についてや自分の悩み等）

（3）書けない子の指導（2011年 浦木 秀男先生の実践から）

○指導実践 日記学習指導案 「ちょっと心が動いたことを書こう」

①言いたいことが書けているか、具体的作品で検討する。

②ちょっと心が動いたことを書くためのメモを作る。

③ちょっと心が動いたことをみんなに伝わるように書く。

④書いたものを読み合って交流する。

どう表現するかというより何を言いたいのか、何を書きたいかを優先する。

文章表現以前の人間関係作りを大切にする。書く前の指導をしっかりと行う。

子どもの書きたいものを大切にしながら、思い切ってどんどん書いてもらう。

(4) 入門期の指導について（1995年 今宮信吾先生の実践から）

心の開放…何を言っても叱られない、何でも言える環境をつくる。

行動の自由…子どもの声を聞く。しゃべってくれてありがとうという気持ちをもつ。

詩はおしゃべりから…「うるさいな」の前にどんなことを話しているのか耳を傾ける。

書けないことも大切に…書けない原因は子どもによってちがう。その子に合わせて考える。

2、実践発表、交流

(1) 「絵から文へ あのね帳の取り組みから」 細木 葵絵（東中筋小学校）

1日の中で一番伝えたいことを絵で描いてもらっている。2冊目になると、自分で文字を入れるようになってくる。3冊目は絵と文で、最終的には文で書けることを目指している。給食中に、友だちの書いたものを紹介するようにしている。

学級の中に、話はできても書くことに抵抗のある子、なかなか言葉が出てこない子がいる。どうすれば楽しく書けるようになるか。

→児童の育ってきた環境がある。心が解放されてない課題もある。待つことも大事。

→表紙にシールを貼ると、喜んで書いてくるようになった。

(2) 「学級通信の取組」 山崎 充子（蔵岡小）

子どもの良さを知ってもらい、子ども同士や保護者と繋がれたらいいという思いで週に1回発行している。どの子の作品も載せることを目標に、通信を発行している。学校生活の楽しさや、生き生きと活動している姿が伝わるような作品を選ぶようにしている。掲載した作品は必ず読み合うようにしている。

子どもの書いたものは、なるべく書き直しにならないように、良さを引き出せるようにしている。2、3行しか書けない児童もいるが、書けない子にも赤ペンを入れる。

→児童の作品「頭をぶつけた」は、行動から気持ちがよくわかる作品である。こんな作品を学級の児童や保護者と共有することで、温かい気持ちになる。コメントも肯定的に書かれていて、温かくて喜ぶと思う。

→マイナスな面を書けるのは、子どもとの信頼関係があつてこそ。

→中学年ともなると、参考作品等を通して様子や会話からといった、インパクトのある方法も学べるという。

(3) 「書かせる取り組みについて」 渡邊 真菜（東山小）

毎日5行日記を連絡帳に書かせてコメントを書いている。授業の振り返りを中心に通信で紹介している。子ども同士が知り合い、一人ひとりが大切にされ、保護者にも知ってもらえる良さがある。その日にコメントを入れて返す時間の確保が難しく、ゲームの内容ばかりになる児童もいる。

→（通信が）手書きの温かさがある。全員が載るのも良い。5行日記には、5行日記の良さがある。

→同じ事ばかりや、ゲームの内容ばかりだと面白くないことをはっきり伝える。そうすると書かなくなったり、工夫して書いてきたりする。

(4) 「1編の作品から」 上田 浩稔（中村南小）

自主学習で書いてきたもので、書くことっていいなあと思った作品を紹介している。自分の体験を振り返り、行動を書くことを通して、その背景や気持ちを伝えることができています。学級で紹介し、相手の先生にも読んでもらった。書いてよかったと思えることで、

自己肯定感が生まれる。読んでもらえていることが、安心感につながる。

→赤ペンはどのように入れているか。

心が動いたように、行間にも入れている。

→書くページのノルマはどうか。

どれだけでもいいよと言っている。長ければいいというものでもない。指導はしない。友だちの作品を読み合う中で、自分も面白いからやってみようかなと、少しずつ表現も変わってくる。のびのびとした、子どもの姿が見える作品。大人の手が入らないのがいい。

(5)「作文や詩の書かせ方について」 沼瀬 美喜 (中村西中)

自分の気持ちをどう書くか。格好をつけた建前の作品を書きたがる。間違ってもいいから、友だちと比べて気が付いたこと等、自分の気持ちを素直に書いてほしい。中には、自分の体験から、言いたくないようなことも素直に書けている作品もある。正しいことを書くということを言いすぎてはいけないのだと思う。

生活日誌に取り組んでいるが、中学生になると、自分のことを語りたがらなくなる。そんな中で、テーマを持たせた作品を書かせたときにどう素直に書かせればよいのか。詩はどのように書かせればよいのか。

→心が動いたときのことを書く。どんな時に自分はどう行動したかを書く。詩にその子(本人)がいることが大切。

→体験を書く。モデル作品を読んで、詩と散文のちがいに気付かせる。詩集「やまもも」から、題名だけ読んでどれを聞きたいか選ばせてみるのも良い。

→好きな詩を選んで交流する時間をもつのも良い。

② 学習会・校正作業

(学習会より)

- ・場面を切り取って、素直な子どもらしい詩を書けているものもあるが、形式的な詩もあり、作品によって差がある。
- ・形式的な詩にならないためには、題材選びが大切。
- ・小学生は自分の気持ちをストレートに表現できているものが多いが、中学生になると本心ではなく、きれいな言葉で書こうとしているのが伝わってきた。
- ・中学生の応募を増やしたい。
- ・まずは、書きたい気持ちが大事にされなくてはならないが、表記の間違ひが多かった(特に句読点の統一や、()の使用)。1行が短すぎたり長すぎたりする作品が多く、表現方法である詩のリズムに馴染まないものがあつた。

4. 今年度の成果と課題

(成果)・今後の実践に生かせる作文の見方や、書かせ方を学習することができた。

- ・作文を書いてそれを友だちと読み合うことで、お互いを知るという書くことの良さを改めて実感することができた。
- ・作文教育の大切さを改めて確認することができ、実践への意欲につなげることができた。
- ・各教員の持ち寄った児童生徒の作品を読みあうことで、指導方法や課題、改善策等について学び合えてよかった。

(課題)・「四万十の子」に応募する学校が限られている。参加校や応募数を増やしたい。そして、子どもの活躍の場である機会を活用してもらいたい。また内容や表現に、作品差があることから、でき上つた文集を通して、詩の見方、書き方の学びにしてもらいたい。

- ・本会の活動を紹介し合つて、「書くこと」の指導について学習したいという仲間を増やしていきたい。